

B-6) 中一高度悪性群・悪性リンパ腫に対する bi-weekly CHOP 療法及び末梢血幹細胞移植併用大量化学療法

山田 聡志・張 高明  
村井 政子・渡辺 卓也 (新潟県立がんセン)  
林 直樹 (ター病院内科)

悪性リンパ腫の標準治療である CHOP 療法を早期に G-SCF を併用して2週間隔で実施し、その忍容性および治療効果、さらに末梢血幹細胞動員能を検討した。70才未満の初発の非ホジキンリンパ腫で、十分な臓器機能を保持している症例を対象とした。CHOP 療法は原法を2週間隔で実施し、終了後末梢白血球数が 10,000/ $\mu$ l 以上となった時点で末梢血幹細胞を採取・凍結保存した。1994.6月~1995.8月に12例が登録され、12例に対して合計77コースの CHOP 療法を実施した。白血球減少のため5コースで1週間の遅延、肝機能障害のため1コースで1週間の遅延を来した。12例中10例が CR に導入され、3例で末梢血幹細胞を採取し、2例で末梢血幹細胞移植併用大量化学療法を実施し、安全に終了した。G-CSF 早期併用により CHOP 療法が2週間で安全に実施可能であり、奏成功率は92%と良好であった。また十分な末梢血幹細胞採取が可能であり、今後、予後不良群の治療として期待できる。

B-7) Aggressive NHL に対する最近の治療戦略

張 高明・林 直樹 (新潟県立がんセン)  
ター病院内科

組織学的に中~高度悪性群に属する非ホジキンリンパ腫(以下 aggressive NHL)は化学療法や放射線治療に対する感受性が高く、標準治療によって80%以上の高い奏成功率が得られる。しかしながら、その5年生存率は30~40%であり、半数以上の症例は再発を繰り返して長期生存不可能である。この点を打破すべく、第一世代化学療法である CHOP を超える第二、第三世代の併用化学療法が開発されてきたが、SWOG/ECOG の大規模な比較試験の結果では奏成功率、5年生存率ともに有意差なく、改めて aggressive NHL に対する新たな治療戦略の開発が切望される。近年、risk factor 数から NHL の予後を予測可能な International Index の概念が導入され、各 risk group 別の治療方針決定が重要視されている。最近、予後不良群に対する有効性が確立されてきた造血幹細胞移植併用大量化学療法の適応と実施状況を含め、当院における aggressive NHL に対する治療

戦略および今後の展望を総括する。

B-8) 診断に苦慮した胃 MALT リンパ腫の1例

五十嵐健太郎・何 汝朝  
坪井 康紀・畑 耕治郎 (新潟市民病院)  
月岡 恵・市井吉三郎 (消化器科)  
藍沢 修 (同 外科)  
渋谷 宏行 (同 病理)

【症例】51歳、男性。【現病歴】平成2年8月より、胃潰瘍にて当院に通院していた。胃前庭部から胃角部に潰瘍が多発し、H<sub>2</sub> blocker では open ulcer となり、オメプラールに変更すると scar となる傾向にあった。平成7年7月5日、ガスター投与中の内視鏡にて、これまでと部位が異なり、体下部より胃角部小弯に潰瘍が多発し、周囲に発赤調の顆粒状粘膜があり、肉眼的に表層拡大型の悪性リンパ腫を疑った。しかし、生検は group I であった。ガスター内服のまま、7月24日、再検したところ、肉眼所見はほぼ同様で、生検にて異型リンパ球を指摘されたが、悪性リンパ腫とは断定できなかった。オメプラールに変更後も、改善傾向はなかった。臨床経過より、胃悪性リンパ腫を疑い、9月13日胃亜全摘術を施行した。切除標本にて、sm 浸潤を示す MALT リンパ腫と診断された。胃リンパ腫の診断に関し興味ある症例と考え、提示する。

B-9) 高悪性度リンパ腫成分を伴った胃原発 MALT リンパ腫の1例

石原 法子 (済生会新潟第二)  
病院病理  
石川 直樹・小山 覚  
太田 宏信・吉田 俊明  
上村 朝輝 (同 内科)  
川口 正樹・相場 哲朗 (同 外科)  
石崎 悦郎 (同 外科)  
武田 敬子 (同 放射線科)

胃の Mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma (MALT リンパ腫)には、低悪性度型と高悪性度型、およびその並存型が存在することが明かにされた。演者らは、高悪性度成分と低悪性度成分を有する MALT リンパ腫の1例を経験したので、病理所見について報告する。

症例は、22才女性。平成7年7月上腹部痛にて某医で胃生検の結果胃悪性リンパ腫と診断され、当院に入院した。当院での胃内視鏡検査では前庭部に多発 IIc 様病

変を認め、生検診断は初回同様であった。同年9月4日、胃全摘術、脾摘術およびリンパ節廓清が施行された。患者は術後化学療法中で、健在である。

手術標本では、前庭部後壁に中心が陥凹し周辺が粘膜下腫瘍様に隆起した IIa+IIc 様病変を認め、同部から連続性に亜全周性 IIc 様病変を認めた。組織学的には、前者は主として高悪性度型、後者は低悪性度型の MALT リンパ腫で、深達度は sm2、一群リンパ節転移陽性であった。免疫組織学的所見も併せて報告する。

#### B-10) 胃悪性リンパ腫における化学療法の有用性、とくに腫瘍消失例の検討

加藤 俊幸・林 直樹  
秋山 修宏・角田 二郎  
張 高明・斎藤 征史 (県立がんセンター)  
小越 和栄 (新潟病院内科)

【目的】胃悪性リンパ腫の治療は完全切除を第一とされてきたが、リンパ腫への化療の治療成績は著明に向上し術前化療が注目されている。【方法】術前化療後の切除された胃リンパ腫15例における組織学的変化を検討した。さらに手術拒否により化療単独で治療中の7例における経過と有用性を検討した。【成績】切除不能例でも化療が奏功し、切除可能や腫瘍消失を経験した。次に短期の術前化療を施行しえた12例では病変が縮小し、7例では瘢痕化し腫瘍の残存を認めなかった。無治療の自然寛解1例も経験した。手術拒否7例でも化療で病変の消失と延命が得られている。また H. pylori 感染率が高く除菌と同時に寛解をみた例もあり、両者の関係を検討している。【結論】胃リンパ腫ではまず切除とされてきたが、近年、低悪性度病変などでは H. pylori 除菌や化療による腫瘍消失が認められている。胃リンパ腫においても病態によっては非観血的治療を考慮すべきであり、治療前の診断がますます重要となっている。

#### B-11) 胃悪性リンパ腫に対する治療方針

梨本 篤・佐々木壽英  
佐野 宗明・田中 乙雄  
筒井 光広・土屋 嘉昭 (県立がんセンター)  
牧野 春彦 (新潟病院外科)  
加藤 俊幸・斎藤 征史  
小越 和栄・林 直樹  
張 高明 (同 内科)  
本間 慶一・根本 啓一 (同 病理)

当科で手術を施行した胃悪性リンパ腫 (ML) 49例を対象に外科的治療上の問題点や治療方針につき検討を加

えた。1987年より術前化療を施行しているため、1986年までを前期、それ以降を後期として比較検討した。

(前期) ① 術前診断の正診率が 36.8%と低かった。② 占居部位は胃全体を占める腫瘍が多かった。③ 術後化療例が大半であった。④ 断端陽性率例が多かった。⑤ 化療は CVP が主体であった。⑥ 根治Cが多く5生率は 57.1%であった。

(後期) ① 術前診断の正診率が 86.7%と向上した。② 占居部位は胃上部が多かった。③ 術前化療が12例 (40%) と増加した。④ 断端陽性率例は1例もなかった。⑤ 化療は CHOP が主体であるが、第3世代の治療法も施行されていた。⑥ 根治Aが多く5生率は 83.2%と向上していた。

【結語】1) ML に体する治療方針は Naqvi 第1期は根治手術のみ。第2, 3期は (術前化療)+根治手術+術後化療。第4期は化療が主体と考えている。

#### B-12) 胃悪性リンパ腫の治療法の選択

小杉 伸一・鈴木 力  
藍沢喜久雄・西巻 正  
鈴木 聡・岡 至明  
植木 匡・桑原 史郎  
畠山 勝義 (新潟大学第一外科)

目的と対象：1995年12月までの過去23年間に教室で経験した胃悪性リンパ腫31例 (55病変) を対象に臨床病理学的特徴、治療法、及び予後について検討した。結果：

① 特徴としては胃上中部に好発する (C28個, M32個)、多発例が多い (9例)、表層拡大を認める例が多い (33個) ことが挙げられた。② 手術は D2 以上の胃切除が 27例に施行され、うち全摘が18例を占めた。手術のみが 17例、術後化学療法が14例に施行された。③ 予後規定因子は肉眼型、腫瘍径、組織学的深達度、リンパ節転移であり、それらを統合した Naqvi 分類が有用であった。I期 (18例) では化学療法の有無に関わらず死亡例はなく、II期 (11例) でも術後化学療法にて予後の改善が認められた。III期の1例で術後化学療法にて5年生存が得られた。全体の5年生存率は80%であった。結語：I期は手術のみで治癒し得る。II期以上でも術後化学療法にて治癒が期待できる。